
貴方と僕の携帯恋愛～僕は貴方を傷つけた～

ゆーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方と僕の携帯恋愛〜僕は貴方を傷つけた〜

【Nコード】

N0262BA

【作者名】

ゆーき

【あらすじ】

大学生が大人の女性が恋に落ちる

二人はアルバイトさきが一緒

出会うことがなかった二人

携帯のメールをとおして二人は
少し距離が近づく

メールという現代のコミュニケーション
だけどそこにはみえないから
簡単に言えてしまうことが…

そこには大学生のウソ…

それでも二人は離れられない…

本当の気持ち

愛してる形

二人の最後にはさよならか優しさか…

大学生の気持ちの本当は

貴女の本当の気持ちは

ウソ…と優しさせつなさ…

決めるのは…

出会い

プロローグ

貴女と出会ったのは……

偶然なのか……

奇跡なのか……

運命なのか……

出会うことがないはずの貴女に

僕は出会った……

大人な貴女は純粹でまっすぐな笑顔……

ひまわりのような笑顔……

貴女の本当を知るまでは……

貴女が何を思い……考え……

生きているのか……

僕は知りたくなった……

貴女の言葉を知りたくなった……

第一章

僕が貴女を知ったのは

大学2年の夏……

本当は前から知っていたが

貴女と話を初めてした時……

貴女を知った

バイト先の休憩で休憩室に行くと

貴女は泣いていた……

僕の知ってる貴女は……

いつも笑って……

みんなを笑顔にさせる貴女

離婚して子供を育てる貴女を

強い人だなと思っていた……

泣いてる貴女は僕のがきたことに気付くと

顔をあげて僕に恥ずかしそうに

「誰にも言わないでね」

と笑った……

その笑顔はとても子供みたいで

抱きしめたい気持ちになった……

僕はとっさにうなずいた

「ありがとう……」

貴女は顔を下に向けて言った

泣くのを堪えるように……

僕は貴女の涙を知りたくなつた……

貴女に少し近づく

「おはようございます」

貴女がいつものようにお店に入ってくる

僕は少し頭を下げた

「元気？」

貴女は少し微笑みながら僕の顔をみている

「元気ですよ…」

「ならよかった」

貴女はいつもと同じように仕事を始めた

昨日泣いていた貴女は今日はいなかった

僕は少し寂しかった…

たまたまその日は僕ともう1人と貴女は休憩が一緒になった…

「ちかさん休憩一緒だからどっか食べに行こうよ」

もう1人のバイト仲間、雄平が貴女を誘ってた

「うーん…いいよ！ 田沼くんも行く？」

貴女は僕に笑いながら誘ってきた

「別にいいよ」

僕が言っていると貴女はちょっとクスツと笑いながら

「決まり」

と言って貴女はいつものように仕事を始めた…

「それじゃ休憩行って！」

店長が僕らに言った

僕らは近くのファミレスに行くことにした

「田沼…お前何たべんの？」

「ホットケーキー！」

「君はお子ちゃま！？」

貴女はあはつと笑った…僕は初めてあはつと笑う人をみた…あはつ…まるでマンガの女の子みたいに笑う…ちょっと僕はおかしくなった。

「いけないの？」

「よいけど…ホットケーキなら焼いてあげるのに私のホットケーキおいしいんだよ!」

貴女は自慢げに僕をまっすぐみて言った

「ふん」

「ちかさん今日うちに遊びに行つていい?」
雄平がちかさんに聞いた…

雄平は何度か貴女の家に行つてゐるらしい…
子供が3人いるらしく、その子たちがなついていると前に聞いて知つていた…

「いいよ!子供が喜ぶし!」
貴女は迷わずに答えた。

「俺も行つていい?…」
ついつさに聞いてしまった…

「来たいの?…別にいいけど…」
あはつとまた笑いながら答えた。

「じゃ…アドレス教えてよ!」
「うん…イタズラメールしないでよ」
と貴女とアドレスを交換した。
僕は貴女のうちに行けることとアドレスを教えてもらつて…ドキドキしはじめた…。

貴女の笑顔は

アルバイトが終わる時間を僕はそわそわして待った…

一緒の時間に貴方も仕事が終わるからだ…

雄平も一緒の時間に終わる

雄平は必ず仕事が終わる時間が貴女と一緒にだと家の方向が同じだから一緒に帰るから…僕も今日は貴女と一緒に帰りたかった。

アルバイトが終わって休憩室に行くと貴女と雄平が先にいた。

「ちかさん一緒に帰ろうぜ!!」

やはり雄平が貴女を誘っていた。

「いいけど…」

と貴女は笑いながら答えた。

「俺も一緒に帰っていい?」

「田沼くんも一緒の方向?…」

貴女はとまどった表情をしていた。

「今日行くのに家知らないし…暇だから。」

「そっかわかった!!」

貴女はあはつと笑った。

三人で自転車で帰っていると…貴方が

「カラオケ行きたいな…」

とつぶやいた…

「カラオケ??」

雄平が言う。

「今日子供が寝たら行こうよ!!」

「なんで？」

僕が言うと

「ストレス解消!!」

「しょうがないな…」

雄平が笑う。

そんな話をしながらしばらくすると雄平は

「俺はこっちだから」

と道を曲がった。

「あとでね!!」

貴女は手をふりながら答えた。

そこからはたわいもない話をしながらちかさんの家まで行った。少

し古いアパートの前で貴女は

「うちここ!一階の右端ね…」

「わかった…」

「6時に来てね…」

「じゃどっかで暇つぶす…」

「ごめんね…うち汚いから!!」

と貴女は笑った。

僕は貴方の笑顔にどきつとしていた…この気持ちはなんだろう…恋?まさかなあ…そんなわけないと僕は僕自身を笑った。

でもなぜか貴女に会いたかった…

貴女の寂しさ

6時ちよつと前に：貴方の家の前についた。
チャイムを鳴らすか考えていると。

雄平がやって来た。

「早く鳴らせよ！！」

僕はチャイムを鳴らした。

チャイムがなるとバタバタと足音がした。

「誰ですか？」

女の子の声でした。

「雄平だよ。」

ガチャガチャと力ギをあけドアが開いた。

ドアからから目の大きな女の子が顔をだしにこり笑った。

「どうぞ」

と貴方の声が奥からした。

僕と雄平がゆっくり家に入ると貴方が食事をつくっていた。

「今日はお好み焼きにしたの。田沼くん食べれる？」

「食べれるよ。」

「ならよかった!!」

そういうとホットプレートで好み焼きをやきはじめた。
慣れた手つきで好み焼きを焼くあなたに、貴女が料理をすることが不思議に思えた。

なぜなら、貴女は生活感を感じない人だった。
子供がいると聞いていたが貴方が子供を育てることか疑問だった。

「ねえねえ…一緒にゲームしよう?」

僕の服を引っ張り、さっきとは違う目がまた大きな男の子が僕を見上げていた。

「たかし!!ごはん食べてから!!」

貴方が男の子に言った。男の子はちょっと寂しい顔をしてしづしづあきらめて、テレビを見始めた。

お好み焼きが焼きあがりテーブルにつくと貴方が取り分けた…お好み焼きを食べ始めた。

その時…貴方の携帯に着信メロディが流れた…

誰の曲か知らない…切ないメロディ…

貴女は携帯を手にとり…

メールを読むと…貴方から笑顔が消えた…

切ない顔…

僕は貴方の切ない顔に胸が苦しくなった…

お好み焼きはともうまかった…。

食べ終わると子供たちとゲームをして遊んだ。
ひとなつっこい子供たちだ。

夜9時になると貴方は子供たちに寝るように言つと、子供たちはしぶしぶお布団に入つて数分後には寝始めた。

「じゃカラオケ行こうよ!」

貴方が笑ながら僕達に言つた。

「大丈夫なの?」

僕が聞くと…

「大丈夫だよ…もう少しでサッカーからお兄ちゃんが帰ってくるから!」

お兄ちゃん?まだ子供がいるのかと驚いた。

「お兄ちゃんって?」

「中学生の男の子がいるの…。」

貴方は中学生の子供がいる人に見えなかった…
やはり不思議な人だ。

三人でカラオケに行くと、貴方は唄う曲を決めていたのかさつといれて…曲が流れ始めた…

知らない曲だったが貴方の歌声にほっとする気持ちになった。

僕も好きな曲をいれて歌った…

「上手だね…」

貴方はあはっと笑ながら聞いていた…

貴方の好きな人…

貴方の寂しい顔を僕は忘れられなかった…

誰が貴女にそんな顔をさせるのか…

僕は知りたかった…。

僕は次の日の夜に貴女にメールをしてみることにした。

いざメールしようとする、なんて書いていいのか分からなかった。
だからありきたりのメールを送った。

「昨日はありがとう。」

お好み焼きうまかったです。

子供たちもいい子だね!!」

数分後貴方からメールが届いた…

「どう致しまして。子供たちも喜んでたよ!

また来てね(笑)」

僕は考えた…なんて聞けば良いのかと…

いい考えは浮かばない…

「そうなんだあ!

良かったよ!また行きます。

ちかさんは誰か好きな人いるの?…」

なんてストレートだが…やっぱり遠回しに聞くのはめんどろだったからだ。

やはり数分後にメールがきた。

「うん（*^^*）おいで（笑）」

なんでそんなこと聞くの（笑）」

やはり僕の聞きたい答えはこなかった…

「いや…なんとなく。」

昨日…携帯にメールがきた時に寂しい顔をして たから。
好きな人になって？」

貴方の返信は今度はすぐにはこなかった。
1時間経って携帯がなった…

「うん…。いるよ（笑）」

別に寂しい顔なんてしてないもん。」

やはりいるんだ…なんとなく僕は貴女の好きな人はわかったが聞いてしまったら…貴方からメールがこない気がしたのでこう送った…

「ふーん 本当？（笑）」

貴方はなんて答えるだろうか…

30分待って携帯がなった…

「さあ…（笑）」

君には関係ないでしょ…」

僕は関係ないって言われて、胸がちよっと痛かった…僕は貴女をも

つと知りたいと思った…

貴方とカラオケ

僕は毎日貴方のことを考えるようになった…。

貴方はいつも笑っていつも優しい。

誰にでもそうだ…どうしてそんなに優しくなれるのか不思議なくらいだ。

貴女には不思議がたくさんある。

不思議な貴女に僕は近づきたくて仕方がない気持ちが僕にはたくさんある。

僕はまた貴女にメールをした。

「ちかさん今日カラオケ行かない（笑）？」

貴方からメールがくるかドキドキした。でも、すぐに返信はきた。

「何時に？」

「何時でもいいよ！」

「うーん。今から二時間くらいならいいよ（笑）」

「やった！！本当に（笑）」

「なにそれ…（笑）いいよ…」

歌いたい気分だし（笑）」

僕は本当に嬉しかった…なんでこんなにうれしいのかわからなかつ

たらないが…貴女に二人で会える事が嬉かつ。

貴方と待ち合わせたカラオケ店に僕は少し早くついた。

貴方は少し時間を過ぎてから…てをふりながらあはつと笑いながら、現れた。

「ごめんね…待った？

どしたの急に？」

「友達誘ったけど…みんなことわられただけ！！」

本当は違うが…僕はウソをついた。

「そっか」

貴方は少しうそに気づいたような気がした。

カラオケは楽しかった。

貴方は僕の歌うつたを面白い歌と言ってニコニコ笑いながら聴いている。

僕は貴方の歌う歌が寂しい歌ばかりで…貴方を笑わせたかった。

2時間喋ることもなく、歌った。

帰り際に僕は貴女に行った。

「また誘っていい？」

貴方はまたあはつと笑い

「いいよ。」

と微笑んだ。

家に帰って僕は貴女にメールした。

「ありがとう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262ba/>

貴方と僕の携帯恋愛～僕は貴方を傷つけた～

2012年1月10日15時47分発行